

熊田陽一郎著

『プラトニズムの水脈』

世界書院, 1996 年, 308 頁

堀 江 聡

本書は、日本における擬ディオニシウス・アレオパギタ研究の第一人者であり、本学会に対してもシンポジウムの提題者として、また会計監査として長年尽力なさってこられた熊田陽一郎氏のプラトニズムをめぐる論文集である。擬ディオニシウス研究の専門書の色彩の濃い前著『美と光』（国文社、1986年）以後に書かれた論考のみならず、それ以前に書かれた論考をも所収し、文学、美術、キリスト教思想の素養豊かな同氏の思索の収斂する地点へ同行の士をいざなうプロトレプティコスな香り漂う一書という印象を受ける。読者は、「自身の個人史をも規定しているアプリオリな力」としてのプラトニズムを「真剣に行ずる」著者の姿勢を、プラトニズムの水脈からの試掘のサンプルを通して、賛嘆の念をもって確認することになるかもしれない。1992年秋に聖心女子大学で開催された中世哲学会大会の、神秘思想をめぐるシンポジウムに臨席された方は、提題者として会場からの質問に答えて壇上の百合の花から神秘への道筋を示された熊田氏の大胆な発言（『中世思想研究』第35号、1993年、198頁の加藤武氏の「意見」参照）を本書104頁において再確認することであろう。

本書は大きく分けて「プラトニズムの歴史的考察」と題された第一部と、「プラトニズムに関連する諸問題」と題された第二部から成る。第一部はさらに6章に分けられ、西洋古代から中世にかけて著者がプラトニズムの水脈に棹さすと判断した哲学者に考察の光が当てられる。まず、その第一章「プラトニズムの源流・初期アカデミアと中期プラトニズム」では、初期アカデミアに属するスペウシッポスが、一の超越性を主張した点でプロティノスの先駆者として評価され、続くクセノクラテスは一を知性と同一視したが、アイデアを知性神の思惟内容とすることにより知性神と世界をアイデアを媒介にして有機的に結び付けた点に功績があるとされる。次に、アスカロンのアンティオコスからプロティノスとその剽窃の疑いをかけられたヌメニオスに至るまで、「些か教科書的な形ながら」（6頁）8人の中期プラトニストが概観されるが、著者

自身断るように (17 頁), これはほぼ, J. Dillon, *The Middle Platonists*, London, 1977 に準拠した論述である。もっとも, 以上の概観を通じて「最小限の原理から全てを体系的に説明する」合理的側面のみならず, 「人間をその背後から支配している超理性的・元型的な力」への洞察をもつものがプラトニズムであるという見通しがつけられる (55 頁)。ただし, 写本伝承の「アルキノオス」(または縮約形アルキヌース) をアルピノスと同一視する J. Freudenthal 以来の慣習を廃する方向が, 近年固まってきたことに注意し「アルピノス」という名は避けた方が無難であったと思われる (cf. J. Dillon, *Alcinous The Handbook of Platonism*, Oxford, 1993)。

第二章はプロティノスに 15 頁, 第三章はプロクロスに 19 頁当てられているが, その僅かな紙幅から両巨星の思索の全体像の記述を期待するとしたら, ないものねだりであろう。研究対象とする原典を局限し, 著者の滞独時以来の長年の師友 W. Beierwaltes の *Enneades* V, 3 への注釈並びに今世紀のプロクロスの三大研究書の一つに数え上げられる彼の浩瀚な書物を導きの糸としたことは, 賢明な選択であったと言える。プロティノスにおいてプラトニズムの合理的体系的側面は, 一・ヌース・魂の三原理とそれら相互の滞留・発出・帰還という在り方として確立するが, 一とヌースを人間の内面にある帰還目標としての元型として洞察した点がむしろ賞賛される。プロクロスにおいては, この帰還の動きは魂が自らの内にある一に導かれて時間の流れの中で一を思惟する弁証法として理論化される一方, 一の超越性が強調され西洋の否定神学へと結実する。

擬ディオニシウスを扱った第四章は, 「神は万物でありかつその如何なるものでもない」という句がリフレインのように著者の思索を突き動かし, 「神学を行じる」著者の凄味が伝わってくる白眉の章である。その肯定・否定・神秘神学は, 歴史的にも神の世界への直接的内在と超越のパラドックスとして後のキリスト教思想に影響を与えたという。神名の垂直構造・水平構造の分析の冴えもさることながら, 祈りと神名の関わり, 「小さい神」の解釈なども啓発的である。

第五章はエリウゲナを主題とするが, 「スコットゥス」も「エリウゲナ」もともに「アイルランド生まれ」を意味するのであれば, 最近の内外の慣習を踏襲して「スコートゥス・エリウゲナ」(141頁) という冗語は避けるべきであったろう。況や, スコラ盛期の精妙博士と取り違えさせる誤植? (目次および 298 頁) は校正すべきであった。擬ディオニシウスの「神の世界への直接的内在と超越」は, エリウゲナにおいて

神顯あるいは神の自己創造として受容され、さらに神と世界、無と存在などすべては四区分を包括し変転するフュシスの運動位相にすぎないというダイナミックな思想へと展開された。

「西洋中世におけるプラトニズム」と題された第六章では、西洋中世がネオプラトニズムから受容したものとして、流出説・光の形而上学・世界の調和の三者が挙げられ、この伝統が育んだ美学的考察の一例としてストラスブルクのウルリッヒがとりあげられる。

さて5章からなる第二部は、西洋古代中世という時代的場所的限定から自由になって流れるプラトニズムの水脈を確信する著者が、哲学・宗教のテキスト、神託、聖像、文学作品、自然の風景といった異なる井戸から釣瓶を落としてみた記録である。

第一章は、プラトンの『饗宴』と『パルメニデス』、アウグスティヌスの『告白録』、パウロの『ロマ書』を比較し、三者に共通する、時間の中に現れて時間を超えるものへの関心の強さを析出する試みである。彼らの永遠と時間を媒介する超越的時間の思想の中には、人間の窮乏の根源をなす時間性の認識とそれを克服せんとするエロス・モティーフが見出されると述べられる。

第二章は、『カルデア神託』とユングの元型論が突き合わせて考察されるユニークな論考である。前者は人間に上昇を、後者は下降を命ずるという相違はあるものの、宇宙霊と同一視された女神ヘカターやアニマという両面価値的性格をもった存在階層を人間の帰還の中継点として認めたところは共通である。すなわち、これらが媒介する元型の力を意識化し統合してゆく者にはこれらは恵み深い導き手になるが、それを怠って日常的意識に埋没している者にとっては手厳しい「運命」や呪いになるという。

第三章で著者は、キリスト教芸術の聖像のうちにプラトニズムがいかに働いてきたかを観察する。聖像を人間の理想像・憧憬像などといった人間本質の投影像と捉えるだけでは十分ではなく、クザヌスの「神の視が人間の視を通して自らの形を視る」という教説を援用しつつ、聖像とは元型的なものが人間の無意識層に働きかけ、意識の保護作用と補償作用を遂行しながら、可視的シンボルとして自己実現したものであると提唱する。

第四章「地上の淨福について」では、この地上世界の価値をキリスト教は否定するが、プラトニズムは肯定していると暗示する辻邦生の『背教者ユリアヌス』の一節の

見方も、キリスト教とプラトニズムの双方とも二世界論で地上世界を蔑視しているという通俗の見解もともに退けるべきだと断じられる。超越的世界とは「末期の眼」が視た、かけがえのない一回限りの現実の存在者に他ならないとされる。

第五章では、著者にとっての武蔵野のように、各人には「野の魂」というべき個人を超えた深層意識的「原風景」が思想・教育に先立つ元型として働き、美的感覚をも規定してしまうのではないかと問いかけられる。

以上手短かに概観してきたが、本書はプラトニズムに興味を覚える一般の読者にとって、構成面でも、基本的知識習得の面でも、平易かつ高尚な文体面でも推奨しうる好著であるのはもちろんのこと、むしろ古代中世哲学の研究者に向けて、狭い専門領域の殻から外に出て「プラトニズムを生きる」ことの模範を示している点に最大の価値があると評者には思われた。

ただし、よき編集者に恵まれなかった不運を差し引いたとしても、後進の研究者に対しては、同一語についての漢字と平仮名、「編」と「篇」、「帰還」と「還帰」の混在、ギリシャ語母音の長短・綴り、アクセントの位置の不正確、氣息記号の脱落、洋書名の非イタリック、出典箇所の変記、原文引用箇所の不足、略号、引用日本人の誤記、訳語の不統一などを避け、校正の範も垂れて頂きたかった。

荒井洋一著

『アウグスティヌスの探求構造』

創文社、1997年、xxii+362+23頁

樋 笠 勝 士

「探求構造」とは何であろうか。探求が単なる「探し物の搜索の経過」であるならば、結果として構築物が見えてくる場合を除いて、そこに「構造」があるとは言えないであろう。しかし、そもそも探求が無秩序なものではなく、探求のそれぞれの部分が何らかの仕方次第に探求の全体像に寄与する構成的且つ求心的な性格をもつものであるならば、そこに「探求構造」があると言ってもよいのではないだろうか。そのような観点からアウグスティヌスの探求の言葉のうちに構造的なものを探ろうとする本